

# 中世の密教僧が描いた特異な「独鈷型日本図」 に関する歴史地理学的研究

—大和国の室生寺と仏隆寺を中心として—

伊 藤 寿 和

## 一 はじめに

本稿は、鹿児島県南さつま市の坊津歴史資料センター輝津館に所蔵されている建徳元年（1370）に写された特異な「独鈷型日本図」に関して、歴史地理学の立場から再検討を加えるものである。

真言宗の密教的な日本の国土観に基づいて描かれた「独鈷型日本図」は、2004年11月に輝津館が所蔵する「坊津一条院聖教類等」に含まれる「密教関係巻物」の中に収められていることを鹿児島県歴史資料センター黎明館に勤務されていた栗林文夫氏が発見されたものである。発見の後、栗林氏<sup>1)</sup>をはじめとして、坊津歴史資料センター輝津館に勤務されていた橋口 亘氏<sup>2)</sup>が、簡潔にして要を得た紹介をなされている。

管見の範囲においては、文献史学の立場から栗林氏と野田泰三氏<sup>3)</sup>がこの「独鈷型日本図」に検討を加えられているが、未だ、歴史地理学の立場から本格的な検討はなされていないように見受けられる。私見によれば、両氏の理解に付け加えるべき点も、なお残されていると考えられる。

また、国文学、特に中世の説話文学研究と寺社縁起研究の立場から、室生寺と如意宝珠に関する研究が藤巻和宏氏<sup>4)</sup>を中心として深められており、さらに、著名な室生寺に関しては、堀池春峯氏<sup>5)</sup>や遠日出典氏<sup>6)</sup>をはじめとする歴史学からも数多くの研究がなされており、多くのご教示を得た。

本稿は、仁和寺と金沢文庫に所蔵されている著名な鎌倉時代末の作成と考えられる日本図に次ぐ古い日本図と評価されている密教的な国土観に基づいて作成された「独鈷型日本図」に関して、上記の先行研究に学びながら、歴史地理学の立場から、当該の「独鈷型日本図」に再検討を加えるものである。

## 二 「独鈷型日本図」の概要

「独鈷型日本図」(図1)の法量は、三枚の和紙を張り継いだ天地約14cm・左右約72cmに、三つの図が描かれている。すなわち、中央に密教の法具である独鈷の形をなした「日本図」が描かれており、その右手には大和国の室生寺周辺の山並みが絵画的に描かれ、左方にも小さな山並みが絵画的に描かれている。「独鈷型日本図」の左手に、朱の文字にて「建徳元年極月十日肥州山鹿庄於金剛乗院書写 金剛資隆尊」と書かれており、現在の熊本県山鹿市に現存する金剛乗院（護



図1 「坊津一乗院聖教類等」収載「日本図」(坊津歴史資料センター輝津館蔵)

国山佛性院金剛乗院)において、南北朝期の建徳元年(1370)の年末に書き写されたことが判明する。「独鈷型日本図」が写された金剛乗院は、寺伝によれば、天長2年(825)に弘法大師が創建し、「西の高野」と称されるほどの伽藍を擁したが、次第に衰退し、法華宗を信仰する加藤清正により寺領などを没収されて規模を縮小し、幾度もの火災に遭いながら、平安末期の保元年間(1150年代)に発見されたと伝えられる山鹿温泉の近くに、現在も由緒ある伽藍を保っている。

### 三 大和国山中の「室生寺」を日本の中心とする国土観

この「独鈷型日本図」作成の意図は、ひとえに大和国の北東部に位置する宇陀郡の山中に建立された室生寺の理解にあると判断される。すなわち、「独鈷型日本図」の中央下には「一山は独鈷ノ最中日本ノ中心也」と明記されている。そして、「独鈷型日本図」の右手には、日本の中心をなす「<sup>べんいち</sup>一山」すなわち、室生寺周辺の山々が絵画的に描かれている。

中世後期に作成された一般的な「行基図」であれば、日本の中心に山城国を描き、そこから四方に向けて東海道をはじめとする官道が引かれている。けれども、この「独鈷型日本図」においては、都である京都を日本の中心であるとは理解せず、また、真言宗の中心をなす京の東寺や紀伊山中の高野山ではなく、大和国の宇陀山中に位置する山寺である室生寺を日本の中心であると理解して描かれている(図2)。この点からも、誠に特異な「日本図」であると判断される。

すでに、黒田日出男氏<sup>7)</sup>は、天台教学の百科全書的な性格を有し、鎌倉後期の文保2年(1318)の自序が記された『溪風拾葉集』に納められている三種の独鈷型の簡略化された図(図3)を引きながら、密教の思想に基づいて「独鈷型日本図」が当時描かれており、その日本図が発見されるであろうことを予見されていた。

#### 三の一 真言宗の諸流派の存在と「独鈷型日本図」の作成・伝授

この点に関して説得力に富むは、宗教史の立場から論じられた赤塚祐道氏の理解であろう。赤塚氏は「一条院の日本図の前には室生寺、仏隆寺の図があるが、西院流『ム言』に収められる「一山図形」にも通じており、場合によっては西院流の伝授過程でこの日本図が伝えられるようになったのかもしれない。」との解釈を提示されている<sup>8)</sup>。すなわち、真言宗の諸流派のうち、二大流派である広沢流と小野流のうち、前者の広沢流に属する仁和三流に属する保寿院流・仁和御流・西院流の中で、西院流(にしのいんりゅう)における密教儀礼によって伝えられた聖教に描かれており、仁和寺で継承されてきた西院流の中で発達した密教的な世界観に基づいて描かれた独鈷型の「日本図」である可能性が高いとの理解をなされている。

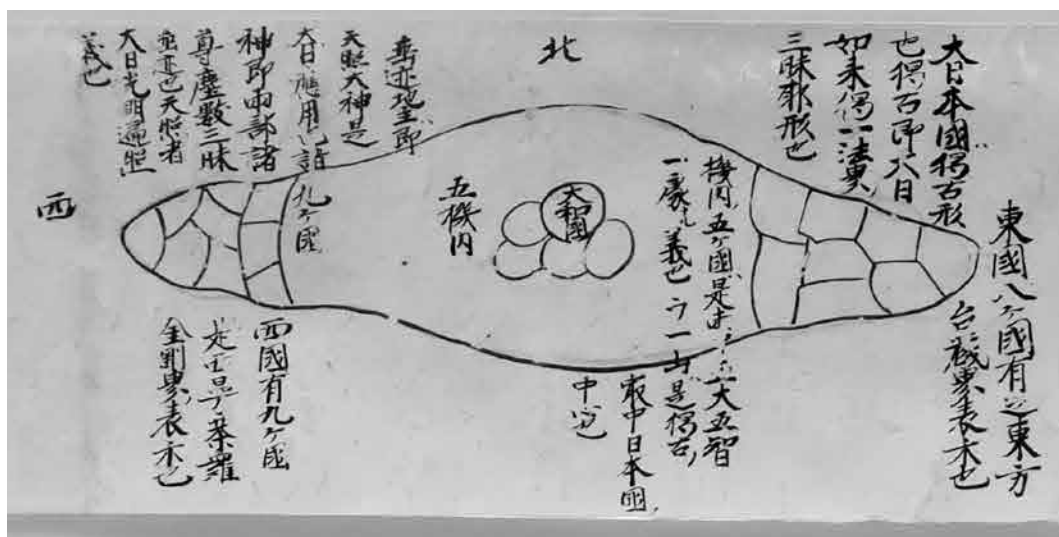


図2 「日本図」の中央（図1と同じ）

なお、「独鈷型日本図」を写した隆尊に関しては、東寺観智院金剛藏本「真言付法血脈 仁和寺」があり、この血脈は真言宗広沢流のひとつである「仁和寺流」の付法の流れを記載したものであるが、同一人物であるか否かは慎重に留保されながら、その中に権律師として隆尊の名前が記載されていることを、栗林氏は指摘されている。

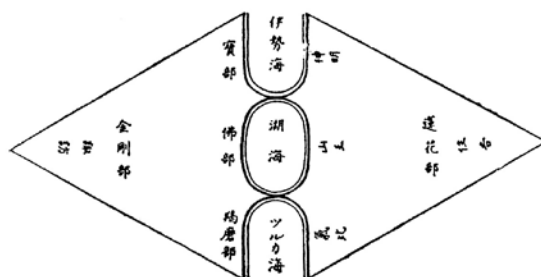


図3 『溪嵐拾葉集』所収の「日本図」

赤塚氏が提示された理解に対しては、室生寺が日本の中心であるとの密教的な日本の国土観が生まれた中世前期の鎌倉時代において、室生寺に埋納されたと伝えられる空海由来の如意宝珠の意味を深く理解して、その関係を解く必要がある。

### 三の二 『弘法大師御遺告（御遺告二十五箇条）』と室生寺の如意宝珠

真言密教の立場から日本の国土の中心を論じる場合、最もふさわしいと考えられるのは都が置かれていた京都の東寺であり、それに次いで、日本の国土の中心としてふさわしいのは空海が入定している高野山の金剛峯寺であろう。東寺と金剛峯寺の真言宗の二大拠点による主導権をめぐる争いは、承和2年（835）に空海が没すると対立が生じ、最終的には空海の没後およそ80年を経た延喜15年（915）に、東寺の長者が金剛峯寺の検校を兼ねることにより、東寺が真言密教を支配する体制が確立した。このような状況をより強固にするために、以下に述べる『弘法大師御遺告（ごゆうごう・遺告二十五箇条）』<sup>9)</sup>（以下、『御遺告』と略記する。）が10世紀に創作・作成されたと想定されている。

すなわち、この御遺告は、東寺の長者のみ知ることが許される秘伝の伝承で、長く東寺の宝蔵の奥深くに秘蔵され、現在では10世紀に創作されたものと考えられているが、中世においては空海が残したものと信じられ、承和2年（835）の年紀を有している。

けれども、この御遺告では、日本の国土の中心が京都の東寺ではなく、何故か、大和国の山深い宇陀郡の山中に位置し、本来的には真言宗の寺院ではなく、法相宗・興福寺の別院であった室生寺に、空海が唐から持ち帰った青龍寺の恵果所縁の如意宝珠（以下、宝珠と略記する。）が埋納されている、すなわち、日本の中心にふさわしい聖なる地であるとの思想と国土観が新たに創作されているのである。筆者はもとより、これまでの先行研究においても、何故に、より著名な大和の長谷寺や高野山の金剛峯寺ではなく、中国将来の宝珠を埋納すべき日本の中心として室生寺が選ばれたのか、十分に得心できる理由や関連する史料・寺社縁起は示されておらず、解明すべき最も大きな課題であると考えられる。

『御遺告』の第二十三条には、「一 一山、土心水師、建立、道場、毎朔可修、避蛇法三箇日夜」と記されている。すなわち、大和国の室生寺において、密教世界に敵が出現した時に修する「避蛇法」に関する秘法が記されている。この『御遺告』に記載された諸法は、空海入滅後に作成された仮託であるが、当時は、密教世界の敵を退散させる究極の秘法であると信じられてきた。

この『御遺告』に記された「避蛇の法呂（秘宝の意）」は室生寺の「精進峯」に埋められているとする。すなわち、空海が唐から持ち帰った恵果より授かった最も重要な秘宝である宝珠を、箱に入れて弟子である「土心水師」すなわち堅恵が修行した室生寺の「精進峯」に埋納し、密教の修法によって守られており、日本の国土に危機が訪れた時には、この宝珠を掘り出して、特別な修法である「避蛇法」を三日間行なえば、敵は撃退・退散されると言う、真言宗（東密）で最も重要視された究極の秘法であった。

第二十四条には、恵果より授かった宝珠は、大日本国の名山・勝地である堅恵が修行をなした室生寺の「精進峯の岫の東嶺」に埋納してあり、この場所を他の者に教えてはならないとまで記されている。

本来的には、都が置かれていた京都に位置する真言密教の本山である東寺を日本の国土の中心であると主張する方が理解しやすいが、そのような主張はなされていない。

### 三の三 『高野山秘記』と高野山の如意宝珠

上記のような東寺の主張に対して、平安時代中期に活躍した僧である明算（1021～1106）を開祖とする真言宗・小野流の支流である中院流においては、宝珠は三つあり、一つは室生山にあり、他の二つは高野山の摩尼山と、空海が入定している奥院の傍らの岳に安置されていると説かれている<sup>10)</sup>。そして、室生寺の峯に安置されている宝珠は恵果所縁の宝珠であり、高野山の摩尼山の峯に安置されているのは空海自作の宝珠であり、高野山の奥院の傍らの岳に安置されているのは空海が京都の神仙苑において祈雨の法をおこなった際に善女竜王から贈られた宝珠であると述べている。けれども、高野山が主張したこの説は余り広がりを見せず、次第に消えていったものと想定される。

しかし、本稿で検討を加えている室生寺を日本の国土の中心となす「独鉆型日本図」と同じく、当時、高野山を日本の国土の中心として描かれた「独鉆型日本図」が描かれていた可能性も残されているように思われる。



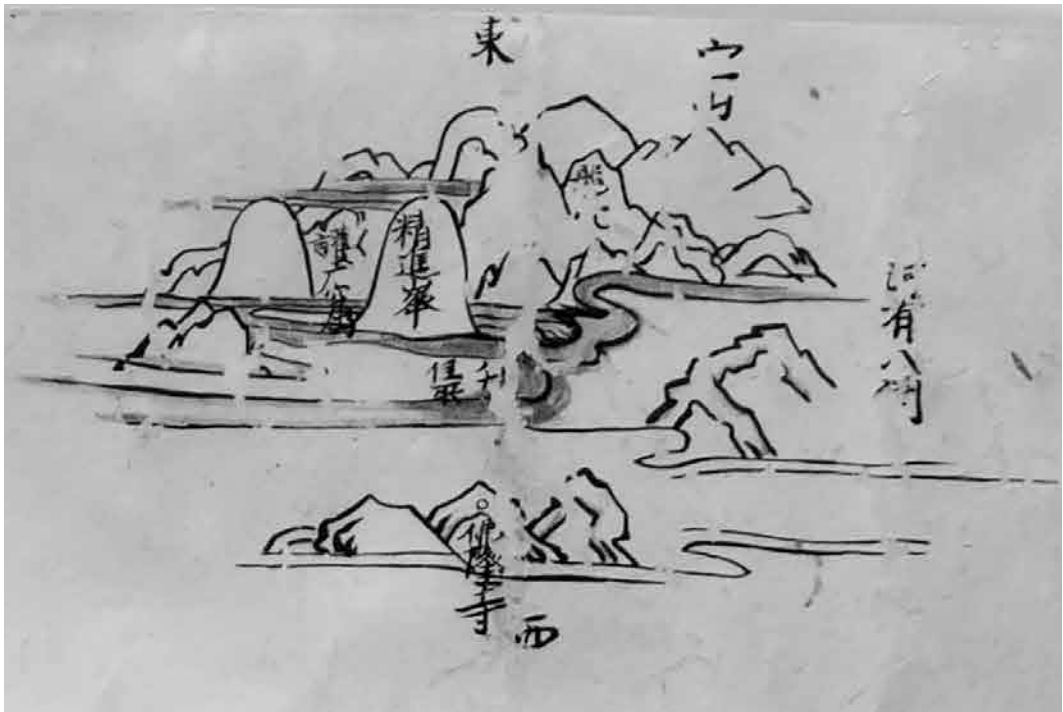


図4 「日本図」の右方（図1と同じ）

#### 三の四 室生寺の諸縁起

では、空海の没後およそ百年後に仮託・創作されたと想定されている『御遺告』に基づく東寺の長者のみに伝えられた究極の秘伝である「避蛇法」と、空海が唐より持ち帰って室生寺の山中に埋納したとされる宝珠が鎌倉時代の後期に再発掘されたことにより、蒙古襲来の国難を迎えていた真言宗の僧侶たちは、弟子たちに、この秘伝をどのように伝授していったのであろうか。

東寺の視点から創作・作成された『御遺告』を解くカギは、次の二点にあると判断される。第一に、日本の国土の中心として相応しいと観想された大和国の宇陀山中に建立された室生寺は東寺に属する真言宗の寺院であり、東寺の長者のみが知りえた恵果由来の宝珠が埋納されている場所は、空海の弟子であると見做されていた「堅恵法師<sup>けんゑ</sup>」修行の地である室生寺の「精進峯」であると伝えられてきた点にある。すでに、多くの研究者が指摘しているように、本来、室生寺は真言宗の寺ではなく、また、堅恵法師も空海の弟子ではなく天台の学僧である。室生寺の精進峯に埋納されたとする恵果由来の宝珠に関しては、東寺と醍醐寺を中心とする真言宗により、大幅な室生寺の縁起と伝承の改変を経ているのである。

その鍵を解くのは、すでに藤巻氏により詳細な検討がなされている鎌倉時代以前に作成されたと想定される重要な三巻の室生寺に関する縁起であると判断される。その三巻の縁起とは、『一山記』・『一山山科寺寛継法橋』・『一山秘密記』である。

まず、『一山記』<sup>11)</sup>においては、「独鈷型日本図」にも明記されているように、一山すなわち室生寺が日本の国土の中心であり、日本の国土が密教の法具である独鈷の形を成しているとの醍醐寺の三宝院流の理解と主張が明記されている。すなわち、

室生山者三部蜜号也。精進峰者五部秘号也。又、善如者即一山守護諸仏教授体也。此即醍

酬寺青龍明神三所之内、中之一所是也。今二所稻荷上下是也。(中略) 彼山八葉也。東北角座是弥勒所座也。又、東北角鬼門方也。為降惡鬼惡龍。北東角㊦山者。又、日本国之中心也。日本国者独股形也。彼山独股中心相当也。

『㊦山記』の記載内容を地図として描けば、まさに、室生寺を日本の国土の中心と見做す「独鉗型日本図」となる。この点は、筆者の新しい見解ではなく、すでに、逸早く、遠 日出典氏などが指摘されている<sup>12)</sup>。

けれども、『㊦山記』には、他にも見落としてはならない重要な記載がなされている。すなわち、その冒頭において、

南瞻浮提大日本国大和州宇田郡有一勝地。彼処名為㊦山。又、云精進峰。彼山無双之靈地。

日本第一の秘処也。(中 略) 此山者有四十九院。大師住滋尊院。堅恵住安養院。震多摩尼仏隆寺被納之。従寺東峰也。寺一町許去三峰有之。東西並其中西件宝処也云々。

『㊦山記』によれば、弘法大師は室生山内の慈尊院に住み、本来的には天台の高僧であるが、空海の高弟であると喧伝された堅恵は安養院に居住し、宝珠を意味する「震多摩尼」は、室生寺ではなく、堅恵が後に建立した仏隆寺に埋納されたと記されているのである。この縁起の記載内容に従えば、日本の国土の中心は室生寺ではなく、厳密には、宝珠が埋納された仏隆寺であると理解し、日本図を描かれねばならないこととなろう。本稿で検討を加えている当該の特異な「独鉗型日本図」において、後方に室生寺の山並みを描き、その前に仏隆寺が描かれている(図4)理由は、まさに、この点にあると理解できよう。

すでに、詳細な関連史料の紹介と検討をなされている藤巻氏<sup>13)</sup>も、堅恵が宝珠をはじめとする宝物を仏隆寺に納め、その堅恵が仏隆寺を開いた天台僧であることを留意・明記されているが、仏隆寺に関しては、何故か、それ以上のさらに詳細な検討を加えられていない。

なお、『㊦山記』においては、「仏隆寺の東峰」に埋納された宝珠の他に二つの宝珠があり、一つは東寺の長者に伝えられ、弘法大師自作の宝珠は室生寺の精進峰に埋納されているとの説が記載されている。

他方、『㊦山山科寺寛継法橋』<sup>14)</sup>では、三寸大の不動明王と宝珠を室生寺の精進峰に安置し、青龍寺の恵果和尚から授かった宝珠は「仏隆寺の石窟」に安置されたとの記載がなされている。すなわち、やはり、宝珠は一つではなく、少なくとも、一つは室生寺の精進峰に、一つは堅恵が創建した仏隆寺に安置されているとの主張がなされているのである。

また、関東の称名寺に伝えられた聖教にも、空海が神泉苑で請雨の修法をおこなった際に現れた善女龍王から授けられた宝珠は室生寺ではなく、仏隆寺に納められて安置しているとの醍醐寺三宝院流の口伝が記載されている<sup>15)</sup>。

さらに、『㊦山秘密記』<sup>16)</sup>においては、東密と両部神道の思想が結び付き、以下のような究極の理解にまで至っている。すなわち、「大和国の室生山は閻浮提第一の靈地であり、密教が栄えるのにふさわしい勝地である。我国は、大日如来が帰ってくる靈地であり、故に、大日の国、大日本国と言う。この国の中に一つの名山があり、㊦山と号す。その山中に精進の峰があり、一つの宝珠が安置されており、インドから伝来したもので、大精進如意宝珠と号している。」との記載がなされており、この縁起では、宝珠は一つであると強調されている。

これらの諸説に対して、藤巻氏が詳細に関連史料の紹介をなされているように、宝珠の数や安



図5 室生寺山中の空海（左）と堅恵（右）（注18より引用）

置（埋納）してある場所に関しては一定しておらず、中世においては、諸説が錯綜して並び立つ状況にあった。藤巻氏の史料紹介と検討によれば、同じく真言宗に属していても、根本法流である小野六流と広沢六流（併せて野沢十二流）の内においてさえも、主に三つの宝珠の存在を説く醍醐寺の三宝院流と勧修寺流では異なる由来や説が唱えられており、日本の国土の中心を大和国の山中に位置する室生寺であるとの説を主導したと想定される三宝院流においても、それぞれの時代により、口伝により受け継がれる僧により、必ずしも一つに固定化されていたものではないことには、十分な留意が必要である<sup>17)</sup>。

#### 四 室生寺と仏隆寺

それでは、平安中期以後に、真言宗による主張により、空海所縁の真言宗の寺であり、霊能溢れる宝珠が安置・埋納されていると喧伝された室生寺と仏隆寺とは、どのような寺院であろうか。すでに、数多くの先行研究がなされているので、簡潔に述べておきたい。なお、室生寺は中世を通じて興福寺の別院としての性格を有する末寺であり、真言宗の江戸・護国寺の末となったのは元禄7年（1694）である。

##### 四の一 室生寺

室生の地は、古来より龍神（龍穴）信仰の聖地であった。奈良時代の末に、後の桓武天皇となる山部親王の病氣平癒の祈願が行われ、その靈験により、室生寺が建立される。その中心となったのは、平安遷都に先立って、延暦12年（793）に藤原小黒麻呂・紀古佐美らと共に平安京の地相を検した興福寺の学僧であった賢璟（714～793）であった。その後、多くの僧が山林修行の場として室生寺に入山した。平安初期の室生寺には、興福寺の高僧・修円をはじめとして、空海の

高弟であった真泰や、天台座主を円澄と争って敗れ、承和10年（843）頃に移住した初代天台座主であった義真の後継者であった円修と高弟の堅恵（堅慧）など、実に多彩かつ力量溢れる学僧たちが集っていた。

上記で述べているように、建立当初には興福寺の別所としての色彩が強かった室生寺であるが、時代が下るほどに、真言宗の諸流が空海所縁の寺であることを多くの縁起や口伝などを通じて喧伝した。その代表的な物として、著名な南北朝期に作製された12巻の『弘法大師行状絵詞』（東寺所蔵）<sup>18)</sup>がある。中世の絵巻類の多くは作成年次や絵師などが不明であるが、この絵巻には関連する「大師御絵用途注文」が東寺百合文書の中に残されており、応安7年（1374）から康応元年（1389）まで16年もの歳月をかけて作製されたことが判明する。

すなわち、本稿で検討を加えている特異な「独鈷型日本図」が建徳元年（1370）に九州の地で写されたのは、東寺所蔵の『弘法大師行状絵詞』が作成される直前の時期に当たり、両者は、ほぼ同時期に描かれたものと判断されよう。

『弘法大師行状絵詞』の第9巻では弘法大師と室生寺の所縁が説かれ、後述する仏隆寺を建立する天台僧の堅恵を、空海の弟子として描いている（図5）。なお、本来は天台の高僧である堅恵が空海の弟子であるとなされているのは、真言諸流派の一部において、堅恵は青龍寺・恵果の後身（転生）であると説かれ、殊更に、空海が堅恵を大切に理由となされており、堅恵の「恵」は、真言密教の教えを請うた師匠である青龍寺・恵果の「恵」を表しているとも理解されていたのである。

その大師と堅恵が共に描かれている詞書の第3段には、次のように記されている。

太和国室生山は、日域無双の霊区、帝畿第一の浄場なり。大師、殊に御心を留められて、密教の恵命を増し、衆庶の薄福を助けんが為に、青竜の阿闍梨附属し給ふ所の秘本尊をこの峯に勞り籠め奉りて、渡海同行の御弟子堅恵大法師を此の岫に住ましめて、修行持念し給ひけり。（中略）

其の山に伽藍あり。菩提寺、妙法寺と名付く。天長・承和の頃、草創ありしかども、今に於いては、礎石隠れて知る人なし。大師入定の後、県の奥継と云ひし人、堅恵法師と師檀の契りを為し、嘉祥二年に及びて、国家の御為に仏隆寺を建立せしより、僧徒住持して、今に密教を弄ぶとなむ。

この詞書の典拠に関しては、真鍋俊照氏の指摘があり<sup>19)</sup>、醍醐寺所蔵の1本に、東寺所蔵の『弘法大師行状絵詞』を転写した由の奥書が残されている。すなわち、

本云う、已上十二卷漸々令書写畢。近比東寺真書絵詞也。以御室本等、所々絵詞取捨云々。今度新加之扁目等、数箇条在之。

永和四年九月十八日 弘顯之本

永徳三年癸亥三月廿三日

於慈尊院閑窓染書 桑門俊盛

この奥書によれば、東寺本の『弘法大師行状絵詞』12巻の作成にあたり、すでに存在していた「御室本等」、すなわち、御室の仁和寺本等の詞書を取捨選択して作成したと理解することも可能であろう。このように、室生寺が空海と本来は天台僧である堅恵を空海の高弟であると喧伝する縁起が、真言宗の本山である東寺をはじめとして、有力な流派である醍醐寺や仁和寺などにお





図6 七重の石塔



図7 如意山如経塔

いて盛んに説かれ、『絵詞』として描かれていたことが判明する。

#### 四の二 室生寺の宝珠

なお、室生寺が中世前期において注目を集めたのは、蒙古の襲来と、その退却に霊力を発揮すると信じられていた室生寺に埋納されていた秘宝の宝珠が盗掘・発見されたことである<sup>20)</sup>。

室生寺に埋納されていた宝珠（仏舍利）が鎌倉初期の建久2年（1191）に発掘されて、その存在が明らかとなった。すなわち、平家焼き討ちの後、東大寺の再建を進めていた重源の元にいた宋人と自称していた空諦房が室生寺の山内に安置されていた石塔を破壊して、秘伝の宝珠（仏舍利）を盗掘したのである。次いで、蒙古襲来の直前の文永9年（1272）年には、東大寺戒壇院の僧侶である忍空と、四天王寺勝鬘院の僧侶である真尊ら10数名の僧侶たちが室生寺に参詣をなし、同行していた甲斐国出身の僧侶である信応が、かつて室生寺の宝珠（仏舍利）を盗掘した空諦の過去の例を思い出し、すでに一部破壊されていた七重の石塔（図6）の下から、宝珠（仏舍利）が詰まった銅筒を再発見したのである。

この時、室生寺に参詣して宝珠（仏舍利）再発見の中心人物であった忍空は、東大寺や泉涌寺で学んだ律僧であり、嘉元年間（1303～1306）には室生寺の長老となっている重要な鍵を握る人物であると判断される。

信応が発掘した室生寺の秘宝である宝珠（仏舍利）は、その後、鎌倉の無量寿院・長老の法爾上人（覚仁）にもたらされ、称名寺の有力な学僧であった釵阿は、弘安3年（1280）年に室生寺の宝珠（仏舍利）を数粒分与され、嘉元2年（1304）には、忍空が長老となっていた室生寺に参詣し、忍空から受法し、延慶元年（1308）に釵阿は称名寺の第二代目の長老に就任している。そのため、現在、金沢文庫には室生寺が描かれた貴重な古絵図が数面伝えられている。

なお、室生寺の山中には、二基の平安時代の石塔が残されている。まず、室生寺の五重塔の西側に位置する如意山には、弘法大師が宝珠を埋納したと伝えられる場所に、現在では高さ約170cmの如意山納経塔（図7）が建っている。鎌倉期の「一山図」には三重塔が描かれており、

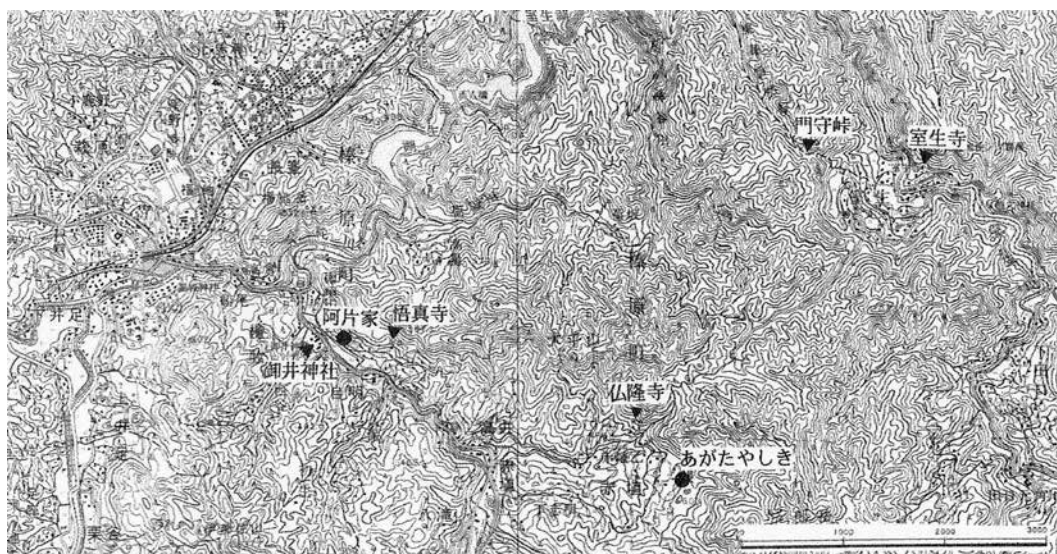


図8 仏隆寺と周辺地域

本来は三重の石塔であったと思われる。昭和21年の調査により、塔の下から水晶製の舍利容器や琥珀玉などが埋納されていることが判明している。

さらに、奥の院へ続く長い石段を上ると常夜堂と御影堂が見えてくる。御影堂の左手奥の岩の上に、高さ約314mの七重塔が建っている。この岩場は諸仏出現の禁足地となされており、鎌倉期の「一山図」では塔下に穴があるとの記載がなされている。

平安時代に建造された三重の石塔と七重の石塔の両者の下に、空海由来と伝えられる宝珠（仏舍利）が埋納されていたものと想定されよう。

#### 四の三 仏隆寺の宝珠

管見の範囲においては、仏隆寺に関しては、室生寺の末寺の中でも特に重要であるにも関わらず、単独の書籍としてまとめられ、刊行がなされていないように見受けられる。今日、紹介されている仏隆寺の一般的な紹介文によれば、空海の高弟である堅恵が大師入定後の嘉祥3年（850）に古代の豪族である県主一族の県奥継を檀越として建立した真言宗の寺院であり、弘法大師が大同年元（806）に唐より茶の種を持ち帰り、高弟の堅恵が仏隆寺にその茶の実を播種し、栽培と抹茶の製法を伝えたのが大和茶の起こりであると伝えられている。

けれども、一般的に広められているこの通説は、史実に基づくものではない。天台の高僧である堅恵により室生寺の南西約4kmに位置する赤埴の地（図8）に別院としての仏隆寺が建立されたのは仁寿2年（852）のことである。貞観5年（863）に鑄造された仏隆寺の鐘は古来有名であり、現物の鐘は伝えられていないが、その拓本が金沢文庫に伝えられている<sup>21)</sup>。

さらに、寺伝によれば、檀越である県奥継と開基である堅恵の両名が中心となって仏隆寺を建立した後、県奥継の子の県秀成や孫の県基高らが俗別当となり、堅恵の跡を継いだ神勢・観信・観教・観継・仲盛らが仏隆寺の寺観を整備して、寛平2年（890）年には定額寺に昇格したと伝えられている。





図9 仏隆寺参道と摩尼山（右手）

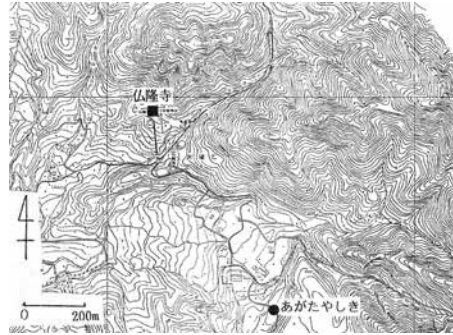


図10 仏隆寺周辺の地形



図11 仏隆寺の本堂



図12 仏隆寺の石廟

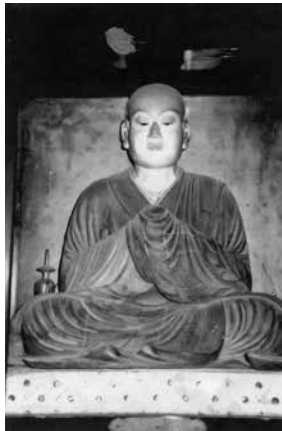


図13 堅恵坐像

室生寺の別院として建立された仏隆寺に関して、特に留意すべきは、次の三点であるように判断される。第一に、上記の数種の「室生寺縁起」にも記載されているように、室生寺ではなく、恵果所縁の宝珠は、『一山記』では仏隆寺の「東峰」に納められたと記され、『一山科寺寛継法橋』では「仏隆寺の石窟」に納められていると記されているのである。

以上のように、室生寺に関する主要な三種の縁起においては、空海の高弟である堅恵が修行していた「室生寺の精進峰」に宝珠が埋納されているとなす最も有力な説の他に、堅恵が創建した室生寺の有力

別院に当たる「仏隆寺の東峰」又は「仏隆寺の石窟」に埋納されているとする、三つの説が並立していたことが重要であると考えられる。その点を踏まえた上で、検討を加えている当該の「独鈷型日本図」を熟覧すれば、室生の山々の左手に特に目立つ位置に「精進の峰」が描かれており、宝珠が埋納されていることを示しているかの如き山容で描かれている。

これに対して、『一山記』では仏隆寺の東に三つの峰があり、その中に震多摩尼の宝珠が埋納されていると記されている。当該の「独鈷型日本図」の仏隆寺の文字の背後には、確かに特徴的な峰が三つ描かれており、特に注目すべきは、中央に描かれた峰の最上部に、小さな丸が描かれていることである（図4）。この小さな○は、偶然に描かれたものではなく、仏隆寺の背後に

現在も存在している特徴的な山並である摩尼山の中に、恵果所縁の宝珠が埋納されている説を描いたものと判断されようし、或いは、その宝珠が描かれているとみることも十分可能であろう。それを裏付けるように、現在の仏隆寺の山号が「摩尼山・仏隆寺」であることも重要である。

さらに、第3の説として注目されるのは、宝珠が室生山の「精進峰」や、仏隆寺の「東峰」でもなく、仏隆寺の境内に所在する「石窟」に埋納されていると記す『一山山科寺寛継法橋』の説である。現在、仏隆寺の駐車場まで訪れると、青空の下、仏隆寺の本堂に続く長い石段の右手に「千年桜」と名付けられた奈良県最古と伝えられる見事な桜の古木が目にとまり、その背後の右手には、「摩尼山」の山号に相応しい尖った山容が望める(図9・10)。仏隆寺の石段の両側には、初秋には朱に染まった彼岸花が立ち並び、参詣者を迎えてくれる。本堂(図11)の本尊は十一面観音であるが、本堂の東に位置する白石神社との間に、貞観9年(867)に入定したと伝えられ、仏隆寺の開基であり天台の高僧であった堅恵の廟所と伝える平安前期の築造と想定される、正面約7m・奥行約5m・高さ約4.5mの袖を有する立派な宝形造りの「石廟」(図12)があり、国の重要文化財に指定されている。『一山山科寺寛継法橋』において宝珠の埋納場所として記載されている「石窟」は、この堅恵の廟所と伝えられている平安前期に築造された宝形造の「石廟」が相応しいように思われる。

もとより、当該の「独鈷型日本図」には、この仏隆寺境内に所在する平安前期の誠に貴重な堅恵の廟と伝える宝形造りの「石廟」まで描いてはいないが、宝珠が安置されていたと思える立派な造りであることは多言を要さない。さらに研究が進められることが期待される「石廟」であると判断される。

なお、後白河天皇の子であり、第6世の仁和寺門跡を務めた守覚親王(1150~1202)の『御紀』<sup>22)</sup>によれば、「一 一山ウ朱安置所事。仏隆寺東峰也。自寺一町計去而有三峰。東西相双。其中岳件宝所也。…堅恵青龍寺和尚御後身也。故恵字可思之。…大師與堅恵殊御契深。」と記されており、『一山記』の記載と同様に、恵果所縁の宝珠は、室生寺の精進峰ではなく、室生寺の別院に当たる堅恵が建立した仏隆寺の背後に位置する摩尼山の三峰の中岳に埋納されており、堅恵は恵果和尚の後身であると記されている。

『一山記』と仁和寺門跡を務めた守覚親王の『御紀』の内容を勘案すれば、広義には、真言密教の立場から見れば日本の国土の中心は、弘法大師が恵果所縁の宝珠を埋納した大和山中の室生寺であり、狭義には、本稿で検討を加えた「独鈷型日本図」に室生寺と精進峰のみが描かれず、その室生寺の前面に、あえて別院たる仏隆寺が描かれ、その背後の峰の中央に、宝珠を意味すると思われる小さな円が描かれている。それは他でもない、真言密教から見た日本の形は密教法具である独鈷の形をなし、その日本の国土の中心は、広義には室生寺であり、狭義には仏隆寺に当たることを描いた、真言密教の諸流派から観想された「独鈷型日本図」であると、本絵図を読み解きたいと思う。

## 五 おわりに

本稿は、南さつま市歴史資料センター輝津館に所蔵されている建徳元年(1370)に写されたことが明記されている特異な「独鈷型日本図」に関して、歴史地理学の立場から再検討を加えたも



のである。堀池氏・達氏・藤巻氏をはじめとする諸先学の研究に導かれながら、真言密教の思想に基づいて描かれた日本の国土と国土観に関して、このささやかな再検討を通して得た成果は、以下のように、まとめることが可能であろう。

一、当該の「独鈷型日本図」は、学会周知の仁和寺所蔵の「日本図」、金沢文庫所蔵の「日本図」と並んで、中世における日本の国土と国土観を復原し、その実像を語る時に必須の貴重な「独鈷型日本図」であると判断される。

二、この「独鈷型日本図」は、東寺・醍醐寺・仁和寺を中心とする真言密教系の思想と国土観に基づいて描かれており、日本の国土を密教の法具である独鈷であると観想するものである。

三、日本の国土の中心は、東寺や醍醐寺などが位置する都ではなく、弘法大師が唐から持ち帰った青龍寺の恵果和尚から伝授された宝珠が埋納されたと伝えられる大和国の山中に位置する、本来的には興福寺の山林修行の別所であった室生寺の背後に位置する精進峰であり、その宝珠が埋納されている室生寺こそが日本の国土の中心であると観想されていた。

四、東寺や醍醐寺・仁和寺を中心とする真言密教における口伝・秘伝では、日本の国土の中心は大和国の室生寺であると、諸流派によって弟子たちに口伝・秘伝として継承がなされていった。けれども、広義には日本の中心は宝珠が埋納されていると伝えられた室生寺であると解釈されていたが、その一方で、『一山記』や『御紀』などに記載がなされているように、狭義には、室生寺の別院として建立された仏隆寺背後の摩尼山の中岳に宝珠が埋納されており、仏隆寺の地こそ日本の国土の中心であるとの観想がなされていた。それを描いたものが本稿で再検討を加えた「独鈷型日本図」であると考えられよう。

この貴重な「独鈷型日本図」は、さらに多方面から詳細な読み直しが必要であり、筆者も、さらに再検討と読み直しを続けたいと念じている。

付記 貴重な「日本図」の掲載をご許可下さいました南さつま市坊津歴史資料センター輝津館をはじめ、お世話になりました関係諸機関の皆様へ、お礼を申し上げます。

特に、橋口 亘氏・藤巻和宏氏・赤塚祐道氏・森 秀樹氏には、貴重なご助言をいただきました。記して、感謝いたします。

前任校である東大寺学園の教員時代以来、肥伊牧と東寺領松牧荘の現地調査に際して、ご厚誼とご教示をいただいております仏隆寺ご住職の鈴木隆明氏と奥様に、心からのお礼を申し上げ、本稿を献呈させていただきます。

#### 注および文献

- 1) 栗林文夫(2006)「南さつま市坊津歴史資料センター輝津館所蔵「日本図」について」、黎明館企画特別展示図録『祈りのかたち—中世南九州の仏と神—』。
- 2) 橋口 亘(2005)「坊津歴史資料センター輝津館所蔵『日本図』」、地図中心、392号。
- 3) 野田泰三(2007)「坊津一条院聖教類等所収『日本図』について」、藤井・杉山・金田編『大地の肖像 絵図・絵図が語る世界』、京都大学学術出版界。
- 村井章介(2014)『『日本』の自画像』、岩波講座『日本の思想』第3巻も参照のこと。
- 4) 藤巻和宏(2001)「一山と如意宝珠法をめぐる東密系口伝の展開—三寶院流三尊合行法を中心として—」、むろまち、第5集。  
(2002)「如意宝珠をめぐる東密系口伝の展開と一山縁起類の生成—『一山秘密記』を中心として—」、国語国文、71巻1号。
- 同 (2003)「初瀬の龍穴と<如意宝珠>—長谷寺縁起の展開—・『一山』をめぐる言説群との交差」、国文学研究、130号。

- 同 (2003)「宝珠をめぐる秘説の顕現―随心院蔵『ハ一山秘密記』の紹介によせて―」、古典遺産、53号。
- 同 (2004)「随心院蔵『ハ一山龍穴秘記』と安禅寺旧蔵聖教群」、随心院聖教と寺院ネットワーク、第1集。
- 門脇 温(1997)「『ハ一山土心水師』をめぐる」、説話文学研究、32号も参照のこと。
- 5) 堀池春峯(1982)「ハ一山図と室生寺」『南都仏教史の研究』下、法蔵館。
- 6) 遠日出典(1970)『室生寺及び長谷寺の研究』、京都精華学園。
- 同 (1979)『室生寺史の研究』、巖南堂書店。
- 7) 黒田日出男(2001)「行基式<日本図>とはなにか」黒田・メアリ・杉本編『地図と絵図の政治文化史』、東京大学出版会。
- 同 (2003)『龍の棲む日本』、岩波新書。
- 8) 赤塚祐道(2007)「薩摩坊津一条院と紀州根来寺」加藤精一先生古希記念論文集『真言密教と日本文化』、ノンブル刊。
- 9) 前掲4)と6)。
- 中村本然(2005)「真言密教の修法と如意宝珠」、高野山大学密教文化研究所紀要、18号。
- 苦米地誠一(2017)「日本密教における舍利と宝珠」、高野山大学密教文化研究所紀要、30号。
- 10) 前掲4)と6)。
- 小峰和明(2017)「高野山舍利会の儀礼をめぐる」、高野山大学密教文化研究所紀要、30号。
- 真福寺善本叢刊(1999)『中世高野山縁起集』、臨川書店。参照。
- 11) 前掲4)と5)と6)。
- 12) 前掲6)。
- 13) 前掲4)。
- 14) 前掲4)と5)と6)。
- 15) 藤巻和宏(2001)「『長谷寺縁起文』観音台座顕現譚成立の背景」、国文学研究、133号。
- 16) 前掲4)と6)。
- 17) 前掲4)。
- 平 雅行(2009)「鎌倉中期における鎌倉真言派の僧侶：良瑜・光宝・実賢」、待兼山論叢、史学編、43号も参照のこと。
- 18) 小松茂美編(1990)『弘法大師行状絵詞』上・下、続日本の絵巻11、中央公論社。
- 19) 前掲18)の解説による。
- 20) 金沢文庫編(2001)図録『蒙古襲来と鎌倉仏教』。
- 21) 竹内理三編(1965)『平安遺文』、金石文編・22号、東京堂出版。
- 22) 中村本然(2005)「真言密教の修法と如意宝珠」、高野山大学密教文化研究所紀要、18号。

#### 補足

- 1) 伊藤寿和(1994)「大和国における古代の農地開発と条里制に関する基礎的研究」、日本女子大学紀要・文学部・43号において、室生寺と仏隆寺と県氏に関して論じている。

